

消費者を裏切らない (元耕種社員の有機農家訪問記)

瀬戸内海小豆島をすぐ目の前にする岡山県牛窓町。ここに国際耕種を飛び出し、食糧自給と食の安全を目指し、有機栽培農家として頑張っている飯山さんという仲間がいる。牛窓町に就農し、すでに2年が経過した。農地は家から軽トラで5分程度の高台や傾斜地に点在している。1haの借地圃場で農業を行っており、6-7反に野菜を栽培し、後は休耕地として、作物を回しながら使っている。

完全無農薬、そして有機肥料施用のみでの栽培で、訪問したときにはニンジン、ナス、大豆など10種類ほどの野菜や豆類などの作物が見受けられた。小規模、多種類の野菜栽培を行い、朝取りの野菜を直接契約消費者へ販売している。一部は宅配便で、また道の駅、自然食品店、お惣菜屋へも販売している。圃場には多くの雑草も見られる。ナスなどは雑草と競合(共生?)していた。収穫野菜は見た目には虫食いがあったり、また葉の表面がごわごわしているところもあり、スーパーで並んでいるような洗練さはない。しかし、夕食で食べたナスや芋には味があり、お世辞抜きに美味しく、また加工してしまえば普通の料理と何ら遜色ない。有機栽培の大変なところは雑草除去、害虫防除(手で虫を除去)である。通常の耕起、作付け、施肥、収穫などの作業にはそれほど時間を取られないが、雑草除去、防除に非常に多くの時間を取られ、また作物が弱い天候不順(台風、日照り等)の時期や育苗期、そして定植直後に多くの労力を費やす必要が出てくる。

地域で有機栽培を行っているのは飯山さんら4軒のみ、それも全て移入就農者。昔からの地域農家の若手後継者はおじいちゃん世代以上に有機農法への理解が少ないのが飯山さんらの悩みという。若手後継者に「そんな農業では経営が成り立っていないじゃないか。」と見られるのがつらい。彼らに理解してもらうには、実際の経営で理解してもらうしかない。経営が安定すれば、説得力のある説明も行え、ひいては地域の栽培姿勢の変革につながるのとつよい信念を持っている。

飯山さん曰わく、「まだ経営は非常に厳しい。また、今年はまだ重なる台風など天候不順で害虫発生も多く、何度も苗が生育せず思うような生産もできなかった。一部の消費者からは『少しは薬かけても良いよ』と言われたこともある。しかし、消費者のなかには化学物質過敏症の人もおり、こうした人たちの信頼を裏切ることにはできない」とのこと。落ち着くまでには5年ほどかかると言うが、来年は稲作、養鶏なども取り入れ、規模拡大と糞尿を利用した堆肥などの循環利用をはかりながら経済的安定の勝負の年と考えている。このような活動の中で、地域の若手後継者への信頼獲得を目指すという。また、無駄をなくし四季折々の食事を楽しむなどの消費者の食に対する意識(食育)が少しでも変われば、完全無農薬、有機肥料のみでも日本の食糧自給はかなり向上すると確信を持っている。今日のような食糧事情(食糧の多くが無駄に捨てられ、また旬をなくした多投入型農業)や海外からの安い農産物の輸入に対し、非常なる危惧を持っていると言う夕餉の論議は遅くまで続いた。明日はまた早朝から野菜の朝取りと販売だ。

(2004年10月、財津)



栽培圃場(結構、雑草に覆われている)



朝取り野菜の泥落とし



さあ、消費者へ出荷